

特別寄稿 *Special Contribution*

ものづくりと創造

原稿受付 2011年4月14日

ものづくり大学紀要 第2号 (2011) 1~4

梅原 猛

ものづくり大学 総長

ここで私はものづくりについて、私が作詞し、廣瀬量平氏が作曲したものづくり大学校歌にもとづいて語ろうと思う。歌詞は三番まであり、一番は次のようである。

縄文の 昔より
国の誇りは ものづくり
遠き世ゆ 伝えきて
みがきみがきし 美しき
たくみのわざを われら学ばん

私は日本の基層文化を縄文文化におく。縄文文化とは、縄文土器を伴う狩猟あるいは漁労採集文化であるが、日本列島は周囲を海に囲まれていて、特に東日本の川ではサケ・マスの遡上があり、甚だ豊かな漁労採集文化が栄えたといつてよい。その豊かな漁労採集文化が生んだのが、あの岡本太郎が絶賛した縄文土器である。

岡本太郎は晩年、テレビに出て、アナウンサーとの対話で「俺が縄文土器を発見した」と豪語した。アナウンサーが「どこで発見されましたか」と問うと、太郎は「上野の博物館で発見した」と答えた。アナウンサーは呆れたような顔をして太郎を眺めていたが、この太郎の答えは正しいのである。

縄文土器を発掘したのは考古学者であることは間違いないが、彼らは、その縄文土器が芸術的に素晴らしいとはいわなかった。考古学者には、すべてのよきものは海外から輸入されたものであるという観念があり、縄文土器の製作時期区分を行ったすぐれた考古学者、山内清男は放射性炭素年代測定による科学的データを信じず、縄文土器は約五千年前に中国で作られ、約三千年前に日本に移入されたものであるとした。現在、最初の縄文土器は一万三千年ほど前のものであることが明らかになったが、それが芸術的にすぐれたものであることは岡本太郎が言い出したのである。

岡本太郎は、日本の芸術にはすぐれたものがなく、ただ縄文土器のみが素晴らしい日本の芸術であるといひ続けた。それは多少極端な見方であるとはいえ、縄文土器が日本のもっともすぐれた芸術品の一つであることは間違いない。

このような縄文時代のすぐれたものづくりの精神が、弥生時代になって稲作文化が成立すると、甚だすぐれた米づくりの精神になった。あるスペインの哲学者は日本に来て、日本の田んぼが実に美しく作られているのを見て、日本の田はまことにすぐれた芸術品で、農民もまた芸術家であると称えた。

日本はまさにこのようなものづくりの国として、縄文時代以来江戸時代の末まで発展してきた。ものづくりはまさに日本の伝統なのである。

校歌の二番の歌詞は次のようである。

日の本の 近き世の
 国の栄えは ものづくり
 豊かなる 世をまねく
 きたえきたえし まことなる
 たくみのわざに われら励まん

日本は非西洋国家のなかでいち早く西洋の科学技術文明をとり入れ、新しい国づくりを始めた。明治の日本の政治指導者は西洋列強の侵略を受けたインドや中国の状況を見て、西洋列強の侵略を防ぐには日本に科学技術文明を移入し、富国強兵の政策をとらねばならないと考えた。富国強兵が明治政府の根本方針であり、日本の教育は、西洋文化を学び、いち早く科学技術文明をとり入れることを目的としていたとってよかろう。

そのような教育では特にものづくりがもっとも重要だと考え、西洋の大学においては理学部に属している工学研究を日本の大学においては工学部として独立させて、工学部を、日本を統治する学問とその教育を行う法学部とともにもっとも重視したのである。現在でも、東京大学や京都大学においては工学部の教員及び学生数が他の学部より圧倒的に多い。そして日本の秀才を選び抜いて欧米諸国に留学させ、先端的工学の知識をいち早く日本に移入した。

それが日本の富国強兵政策であったが、ただ技術を移入するだけでは不十分である。その技術をもとにして実際にものづくりを行う技能者が必要である。日本の工業の最初のすぐれた技能者はまことに芸術的な家具などの製作に携わる木地師出身者であったといわれるように、すぐれた技能者が技術者とともに日本の工業の発展に貢献し、富国強兵の日本づくりを行ったのである。近年、ややもすれば技術のみが重視され、技能が疎かにされる傾向があるが、それは日本のすぐれた伝統が失われることにほかならない。

校歌の三番の歌詞は次のようである。

この道の すたれなば
 国の亡びは きたるらん
 身と心 一つなる
 にゅうものづくり 世直しの
 たくみのわざを われらつくらん

そしてものづくりにはやはり創造がなくてはならない。それが校歌で私がいう「にゅうものづくり」である。創造について語ろうと思うが、私にはものづくりの経験がないので、私が専門の学問に関してどのような創造を行ったかを語ることにしよう。

私はさまざまな分野の学問研究を行い、各々の分野において多くの新しい説を出してきたが、特に知られているのは、今から四十年ほど前、私が四十代後半に出した八世紀の日本についての学説である。そのころ私は『神々の流竄』（古事記・日本書紀論）『隠された十字架 法隆寺論』『水底の歌 柿本入麿論』という著書を立て続けに書いた。

『神々の流竄』では、『古事記』『日本書紀』の実際の著者は藤原不比等であるという説、『隠され

た十字架』では、法隆寺は聖徳太子一族の鎮魂の寺であるという説、『水底の歌』では、柿本人麻呂は流罪になって水死の刑に処せられたという説を私は提出した。いずれも当時の学者にとっては思いもかけない説であり、彼らの多くはそれらの説を黙殺しようとしたが、いずれの著書もベストセラーとなった。そして現在にいたるまで、それらの説に真正面から反論する学者はなく、私の死後、これらの説が定説化することは間違いない。

ここでは、三作の著書のなかから『水底の歌』を選び、私がいかにして大胆な説を発表するにいたったかを述べよう。

一、懐疑。私は『万葉集』を愛読し、何度か注釈書を片手に通読したが、どうしても分からないことがあった。それは、柿本人麻呂についてである。江戸国学の創始者、契沖及び賀茂真淵によって、柿本人麻呂は六位以下の甚だ位の低い官僚で、五十にならずして死んだとされた。すべての『万葉集』研究者はこの契沖・真淵の説を疑うべからざる真理として受け入れ、人麻呂は石見国で取るに足りない下級官僚として五十にならずして死んだと考えた。

私もそれまでずっとこの説を信じていたが、何か腑に落ちないところがあった。人麻呂は宮廷歌人であり、皇子たちとほとんど対等に歌のやり取りをしている。皇子と歌のやり取りをするには殿上人すなわち五位以上の官僚でなければならず、どうして六位以下の人麻呂にそのようなことができたのか。また、古来人麻呂の像と伝えられるものの多くはひげを生やした老人の像であり、とても五十以下とは思われないのである。

そして『古今和歌集』の真名序では「柿本大夫」と記されているが、大夫は五位以上を示す。さらに仮名序には、人麻呂は「おほきみつのくらゐ」とあるが、「おほきみつのくらゐ」とは正三位のことである。『古今集』は『万葉集』あるいは人麻呂について正確な知識をもっているはずであるのに、なぜ「柿本大夫」といい「おほきみつのくらゐ」というのか。このような懐疑が長い間私の中にあつた。

二、直観。ある日『万葉集』を読み返していたとき、人麻呂の妻、^{よきみのおとめ}依羅娘子が人麻呂の死を詠んだ

今日今日と我が待つ君は石川の貝に交じりてありといはずやも

という歌を読んでいいるうちに、この歌を文字通りに解釈すると、人麻呂は川の底に沈んでいて、妻がその屍を探しあぐねているのではないかという考えがひらめいた。これは私にとってもまったく思いがけない直観であった。

学界の定説にまったく反する説の直観であり、そのような直観がひらめいたとき、多くの人は「そんなことはあるまい」と考えてその説を捨ててしまう。しかし私は、ひょっとしたらこれは真実かもしれないと思って、あらゆる文献に当たり、その説を徹底的に吟味したのである。

三、実証。その結果、私は、室町時代の『万葉集』注釈書に人麻呂が二度も流罪になったという記述があり、また人麻呂は水死したという説を真淵の師にあたる荷田春満が唱えているのを発見した。契沖は『万葉集』に「人麻呂死す」と記されていることから、三位以上が亡くなれば「薨」、四位・五位は「卒」、六位以下は「死」と表記するという律令の規定に従えば、人麻呂は六位以下であったと断定し、真淵もその契沖説によって人麻呂をとるに足りない下級官僚であったとするが、どんなに高い位にあった人でも、ひとたび流罪になれば「死」と表記されるのは、正二位であった長屋王の例によっても明らかである。

こうして私は契沖・真淵説を根本的に否定し、人麻呂は当時の政界を支配していた藤原不比等の怒りに触れて流罪になり、最後は石見国で流罪刑死したことは間違いないと考えた。

四、発表。このようなことが明らかになれば、発表しなければならない。新説を発表するには勇気が必要である。新説を確信しているのは自分ひとりで、世間はまったく旧説に依っている。それゆえ新説を発表することは全世界を敵に回すことになる。私は、たとえ味方がいなくても、真理が私の味方であ

るかぎり恐れることは何もないと考えてその説を発表し、多くの学者からの批判、中傷、黙殺、冷笑を受けたが、湯川秀樹、吉川幸次郎、桑原武夫などのすぐれた学者は私の説を認め、思いがけず大佛次郎賞をはじめいろいろな賞をいただいた。

以上、私の経験を語ったが、創造はこのような過程で起こるものである。長い間の懐疑の果てに直観がひらめく。その説を私のような人文科学では実証、自然科学では実験によって確かめ、間違いないと思ったならば勇気をもって発表しなければならない。日本の大企業ばかりか中小企業においても新しい技術の創造があり、それをもとにして発展した企業も甚だ多い。

学問における私の創造の体験が多くの技術者や技能者の参考になれば幸甚である。
